

月刊

シルバー 人材センター

高 齢 社 会 を 生 き る

- ◆ **インタビュー** 人生100年時代の高齢者〈生き方・支え方〉
日本シニアライフ株式会社代表取締役社長 森薫
- ◆ **特別企画** 世界が注目するシルバー人材センター

2023

8

労務行政

人生100年時代の 高齢者

〈生き方・支え方〉

カジノ風のレクリエーション活用で 要介護でも自由な選択と生きがいを支援

人生100年時代における高齢者の生き方や周囲の支え方について、各界の専門家に話を伺います。今回は、カジノ風のレクリエーションを活用した「デイサービス ラスベガス」で生きがい支援を目指す、日本シニアライフ株式会社代表取締役社長の森薫氏です。



もり 森 薫

日本シニアライフ株式会社代表取締役社長

1977年神奈川県生まれ。国士館大学卒業後、訪問介護事業所、通所介護事業所の管理者を経て、株式会社日本エルダリーケアサービス代表取締役、ACA Next株式会社代表取締役を歴任。その後、現職。2012年よりアメリカ視察を行い、高齢者の暮らしを学ぶ。2013年に「デイサービス ラスベガス1号店」を東京・足立区にオープン後、次々と出店し、世界各国のメディアで紹介されている。

デイサービスに カジノ遊びを取り入れる

——森さんが代表を務める「デイサービス ラスベガス」(以下、ラスベガス)は現在、さまざまなメディアから注目されています。どのような施設なのでしょう。

森 介護が必要となった高齢者に来ていただき、日中、レクリエーションや入浴を提供する施設です。今は関東・中部地方を中心に20拠点以上で展開しています。全店舗合わせると、月平均1100人ほどに利用していただいています。

当施設の最大の特徴は、レクリエーションとして「ゲーミング」を取り入れている点です。研修を受けた職員がディーラーに扮してプレイするブラックジャックなどのカジノ遊びをはじめ、マジシャン、パチンコなどを自由に楽しんでもいただけます。

——どのようにゲームを行っているのでしょうか。

森 各ゲームは「ベガス」という施設内通貨を使ってプレイしていただきます。機能訓練の体操などへの参加を通じてお渡しするようにして、利用者が個々の裁量で増やし、

ためておけるようになっていきます。ベガスは、もちろん換金不可。施設で使うだけの通貨ですが、ためる・増やすこと自体を楽しんでいただいています。

さらに、ベガスをためることに前向きになつてもらうための工夫もあります。例えば、毎年1回、ベガスを多くためた10人を表彰する「VEGAS RICH10」。全利用者の中のトップ10ですので、これは非常に名誉なことです。写真付きのポスターを使って大々的に告知することもあり、その掲載を目指すことをモチベーションにしている人もいます。

——ほかに、従来型のデイサービスとは違う工夫があるのだとか。

森 内装や衣装、送迎車などにもカジノのイメージを取り入れています。多くのデイサービスの内装は病院のような雰囲気ですが、当施設ではあえてシャンデリアやカーペットなどを取り入れています。また、職員はディーラーのような正装をして、送迎車には黒色のバンも用意。これらには「利用者に実際のカジノに入ったときのような高揚する気持ちを少しでも感じていただけたら…」という思いを込めています。

このような工夫を行うようになったのは、

実はあるクレームがきっかけでした。以前、白いワゴン車で利用者宅に迎えに行った際、「介護施設に通っているのが近所に知られる」と怒られてしまったことがあったのです。そうした反省もあり、なるべく介護つばさを出さないよう苦心して、少しでも利用者に「楽しそう」と思ってもらっていただくための仕掛けを考えました。

アメリカで目にした 「自由な高齢者」からの影響

——そもそも、なぜこのようなデイサービスをつくるようになったのでしょうか。

森 私は以前、従来型のデイサービスの管理者をしていました。しかし当時は、男性の利用者がいらつしやらないというジレンマを抱えていました。というのも、そのデイサービスでは、「風船バレー」や「ペットボトルボウリング」などのレクリエーションが多く、一部の男性にとつてはあまり引かれる内容ではありませんでした。そうしたことから、どんな人にも積極的に通っていただけるようなサービスを模索していたのです。

一方、2011年に起こった東日本大震災も大きなきっかけとなりました。あの時、「日



「と言われたこともあります。そこで、私たちは、「税金を使っているからこそ、結果を出さなければならぬ」と考えました。その結果というのは、利用者の笑顔が増えたり、日常生活の向上やご家族の負担軽減などをすることだと、スタッフと共有しています。」

高齢者や家族が困らないよう 来られる場所を提供する

——森さんが描く、これからの事業の展開について教えてください。

森 現在、ありがたいことに全国各地から「うちの地域に出店してほしい」「ライセンスに加盟したい」という要望をいただいています。

しかし、これ以上やみくもに増やすつもりはありません。私たちの縁とゆかりのある場所で、目の前の高齢者やご家族が困らないよう、来ら

「ゲーム」を通じて 人と向き合う時間をつくる

——ラスベガスにいくと、レクリエーションを中心に、各利用者がそれぞれの時間の過ごし方を楽しんでいる印象がありますね。

「ラスベガスにいくと、レクリエーションを中心に、各利用者がそれぞれの時間の過ごし方を楽しんでいる印象がありますね。」

本が駄目になるのではないかと「介護保険事業にも影響があるかもしれない」と不安を感じました。そうした動機から、国民皆保険制度がないアメリカの地で生活する高齢者の様子を視察しに行くことを決めました。

アメリカでは、高齢者が実に楽しんで遊んでいるのを目の当たりにして、カルチャーショックを受けました。印象的だったのがカジノです。施設は大にぎわいで、高齢者も車椅子利用者もどんな人でも普通に楽しんでいる。「年を取っても体が不自由でも、私はどんな制限も受けない」という強い意思が伝わってくるようでした。でも、よく考えると、それは当たり前のこと。いつまでも好きなことができるなら、そんな幸せはないはずですが、ただ、日本はそのような現状とは言えない。

そのことに気付き、「日本でカジノを取り入れたデイサービスをつくりたい」と発想するようになったといきました。

森 私たちは「その日の気分で過ごし方を自由に決められる」ことを重視しています。そのため、できるだけたくさん「やりたいこと

の選択肢」がある状態をつくり出すようにしています。考えてみれば、私たちは生まれてからいろいろなものを選んで生きていますよね。しかし、介護が必要になった途端に、やりたいことの選択肢が限定的になる。それは良くないことだと思います。

——そのような思いは、ゲームの種類の多さにも表れていますね。

森 ゲームには、さまざまな良さがあります。ゲームを通じて、スタッフと利用者が向き合うことができます。私たちは介護保険の請求業務などの書類作成業務を効率化するようにして、1人のスタッフが1日3時間ほど、利用者とのコミュニケーションを取る時間を確保しています。ゲームという共通の話題があるから年齢差があっても自然に話し合え、コミュニケーションが取れることで満足度を上げるようにしています。

——ラスベガスは、食事のメニューも非常に特徴的です。

森 麺類や丼物、カレー、焼きおにぎりなど、常時8種類ほどのメニューを用意しています。

要介護状態の場合、笑顔になることは身体面だけでなくメンタル面にも大きな影響を与えます。当施設に通ううちに積極性が出て元

気になり、要介護度が下がるケースも少なくありません。中には要介護度が5から3に下がった人や、要介護3の人が介護から卒業したケースもありました。

また、当施設ではゲームでベガスを使っているため、自然に計算する機会が増えていきます。そうしたことが、認知機能の向上にもつながっていると考えています。

——森さんが描く、これからの事業の展開について教えてください。

森 現在、ありがたいことに全国各地から「うちの地域に出店してほしい」「ライセンスに加盟したい」という要望をいただいています。

しかし、これ以上やみくもに増やすつもりはありません。私たちの縁とゆかりのある場所で、目の前の高齢者やご家族が困らないよう、来ら



これが通所介護サービス施設!? 意外性と楽しさがある内装の「デイサービス ラスベガス」。ゲームを通じ、認知機能の向上やコミュニケーションの機会につながっている。利用者の平均年齢は約84歳

税金を使う事業だからこそ 「結果」を求める意志を持つ

——目新しい取り組みということで、開設した当初は批判もあったそうですね。

森 「介護保険という税金を使って遊んでい

れる場所を提供すること。地域の皆さまに理解を得ながら、1店舗ずつ丁寧に広げていくつもりです。」

——高齢者事業を手掛けるという観点で言えば、シルバー人材センターも同じ立場です。「目の前の高齢者のために」というのは、参

考になる意見だと思えます。

森 高齢者のやりがいを支えるためには、「いわゆる高齢者扱いをしないこと」だと考えます。例えば、マージャンの役満で和了したときは、利用者もスタッフも誰でも記念写真を撮っています。また、マージャンを打ち終わった後は、スタッフと一緒に皆さんで牌の清掃をしています。

誰にとつてもすごいことやありがたいことは、自然に笑顔になりますし、心からの感謝の気持ちも伝わります。それが次のモチベーションにも、前向きな気持ちを保つことにもつながっていると考えています。

このような点を共有しつつ、これからはシルバー人材センターとも、高齢者が「行って良かった」と思ってもらえるような場所の一つとして切磋琢磨できたらうれしいです。

取材/山辺健史
写真/原 貴彦